

週刊 座、グレート・リーダーズ通信

『インド私録-思い切り取り組んだこの 50 年-』 No.16

今週のキーワード! 情報

量や数ではなく、判断を示すこと

これまでの放送で武藤氏は何回か「外交官の仕事の 1 つは相手国の情報を集めること」と述べています。また、相手から情報を得るには、「自分が相手にもそれに見合う情報を提供できる存在であると思わせなければならない」とも過去何回かの放送で繰り返し語っています。

ところでこの「情報」とはいかなるものでしょうか。外交官は相手の情報と引き換えに自国のどんな情報を与えるのかと、疑問に思った方もいるかもしれません。9 月 17 日の第 16 回放送で武藤氏は、「『情報』とはなにかという判断ですね。『これをどう思うか』と聞かれたときに『これはこうだ』と一定の考えを述べることで、それが情報であると語っています。

その意味で、番組の前半で紹介しているタイムズ・オブ・インディアの N.J.ナンポリア氏は、1970 年代に誰も注目していなかったインド人民党(BJP)の台頭に武藤氏の注意を促し、また放送にもあるように、1962 年の印中戦争では中国側の意図と行動を的確に予測しています。まさに彼の「判断」こそ「情報」と言えるでしょう。



N. J. NANPORIA

R.K.ラクシュマンが描いた N.J.ナンポリア編集長。1957~1967 年の間タイムズ・オブ・インディアの編集長を務めた。出典:Times Of India

直伝・外交の極意

足を使い、早く行く

武藤氏は、こうしたジャーナリストをはじめ貴重な情報源となる人々には、自ら親交を求めていったと語ります。「めぼしい人には自分から出向いて行く主義。相手からは来てはくれない。自分から訪ねて行って人間関係を築かなければ」。それは参事官や書記官時代はもちろん、長となるボンベイの総領事として赴任した後も貫いた主義とのこと。とは言っても、「初めての人に会いに行くのはものすごく億劫。気を遣うしね」(意外!)。ただ、初対面の訪問には秘策があり、それは「約束の時間より数分早く行って相手を待ち、相手に『やあ、遅れてすみません』といわせしめること。そうすればこちらの勝ちで、相手は

待たせた引け目から必要以上にしゃべってくれるわけです」!!

尋ね人、あの学生たちは今?

デリーで財布をすられた大阪外語大生

ところで、『インド私録』ではハリダット・シャルマ氏がオールドデリーで財布をすられた大阪外語大の学生 3 人組の窮状を自身が編集長を務めるヒンディー語版タイムズ・オブ・インディア紙に「日本の学生、デリーで盗難に遭う。これはインドの恥なり」という記事を掲載し、心あるインド人から善意の寄付を集めたというエピソードが紹介されています。

事件のあった 1960 年代からはや半世紀。この 3 人の学生も今では 70 代に差ししかろうというお年でしょうか。それはご自分だという方、その時のお話しをスタジオでしてみませんか。是非ご連絡を!

RNM@radio-new-mumbai.com まで。

第 18 回放送は、9 月 28 日です。



左:武藤友治氏。右:白水和憲氏。

ある日のスタジオ

